

# 富士山信仰の歴史が 語りかけてくる町「河口」。

生まれ育ったふるさとの  
歴史や文化を後世に伝え、残していくために。

## 外川 真介さん

上の坊プロジェクト代表

「上の坊プロジェクト」では、地元・河口の歴史をひもとき、  
文化の掘り下げと情報発信を行っている。



[富士講の白装束に刷り込む版木(右)]

この版木は「富士山牛王宝印図」といわれ、道者の行衣に刷り出された。道中の安全と、神様を背負うことで守り導かれるといわれていた。河口の版木の構図は、台座の部分が、てんぐの葉うちわになっているのが特徴。

[富士講の巡礼に使われたと思われる携帯用コノハナサクヤヒメ像(左)]



富士講の道者がみそぎに訪れた「母の白滝」前で

「一冊の本との出会いが  
ふるさとの素晴らしさに  
気づくきっかけに」

地元、富士河口湖町河口地区の歴史や文化を掘り下げ、発信するために『上の坊プロジェクト』を立ち上げた外川真介さん。「もともと歴史が好きというタイプではなかったんですけど笑う外川さんが地元の歴史に興味を持ったのは、偶然手にした一冊の本がきっかけでした。「古新聞などの集積所で見つけた『河口湖町誌』を読み、自分が生まれ育った河口が、実はとんでもない魅力がある、世界に誇れる町であることを知ったんです。そこでスイッチが入りました。子どもと一緒に地元を歩いてみると、今までは気づけなかった貴重な歴史の痕跡を見ることができました。これは、もつとしっかり地元の歴史を学び、次の世代につなげていかなければならない、そして外にも発信していく必要性を強く感じたのです」

「古来より「未知」であるからこそ  
人々を引きつけてきた富士山」

河口は奈良時代には宿駅ができ、人々や文化、物資が行き交う拠点であり、富士山信仰もここから広がっていったといわれています。「富士山の噴火を



河口浅間神社



東日本復興祈願富士山代参で訪れた、富士山頂火口前

鎮めるために河口浅間神社が創建され、多くの参拝者が訪れるようになり、御師の町としても発展していききました。御師とは、参拝者(道者)を泊めてもてなしたり、祈祷、案内など一切を請け負ったりした地元の神職者のことで、河口にも最盛期には140軒もの御師の家がありました。しかし、その後、富士講の大流行による大衆化で富士吉田に拠点が移り、河口御師は徐々に衰退していったのです。しかし純然たる富士山信仰を考える時、その基礎を築いた河口に、私は深い意義を感じています」

「『上の坊プロジェクト』は組織化はしていません。声を掛けて集まってくれた人と一緒に活動をすすめるスタイルをとっています。さまざまな活動の一つに、東日本大震災の復興祈願と鎮魂を目的として、毎年7月と8月に行っている『富士山への代参』があります。代参とは、代わりに富士山に登り山頂で祈ることです。富士山に登った時の印象はその都度違い、言葉にできるものではありません。登って初めて分かるものなのです。人々が昔から富士山にこれほどまで引きつけられるのは、富士山が『未知』であるからではないか、と私は感じています」

「私を魅了した河口の素晴らしさを伝えるための活動が、これからも地域の活性化と未来を担う子どもたちの誇りにつながっていつてくれたら、うれしいと思います」